『シブリングの高嶺たち』※本文一部抜粋

「――何をしているの？」

その場の空気が一変する。耳に届いた凛とした声にあおいは目を開け、声のした方へ目線を向けた。
垂れ下がったツタと葉で作られた自然のカーテンの奥から、誰かが歩いてきている。
足元は見えるが、カーテンの奥は影が作られており、その人物の顔を隠していた。
葉のカーテンを潜ると、影とカーテンに隠されていたその顔に陽が当たる。脚を止めたその人を見て、あおいは目を見開く。
そこには、透き通るようなプラチナブロンドの長い髪に、宝石のような紫の瞳を持った美しい人が立っていた。
「(女性……？　いや、でもさっきの声は……)」
ワンピーススタイルの制服に緑色のリボンを付けたその人が、またこちらへ歩みを進めると、男子生徒はあおいに伸ばしていた手を誤魔化すように引っ込めた。
「な、なんだ高麗か……お前こんなところでなにやってるんだ？」
「なんだじゃないわよ。あなたこそ、一体その子に何をしているの？」
「いや、俺は別に……」
「あらそう？　なら、早くその子から離れた方がいいわ。傍から見ると、まるで追い詰めてるように見えるから」
「ぐっ……」
『高麗』と呼ばれたその美しい生徒は腕を組み、まるで睨みつけるかのように目を細めて男子生徒を見据える。
その視線に居心地が悪くなったのか、男子生徒は視線を泳がせながら、後ずさりをしてあおいから離れていく。
「あ、あぁ～！　そういえば、俺用事があったんだ……！　あははっ……じゃあな高麗！」
不自然極まりないセリフを残し、男子生徒はまるで逃げるようにその場から走り去っていった。
今までの一部始終を見ていたあおいは、助かったと安堵の息を吐き、チラリと自身を助けてくれた美しい生徒へと視線を向ける。
「はぁ……全く……」
呆れたと言わんばかりの声を出しながら、その美しい生徒はあおいへゆっくりと近づき、微笑みながら優しく声をかけた。
「大丈夫？」
こちらを気遣う優しい声と、首を傾げながら微笑むその姿に、あおいの口から自然と言葉が零れる。
「きれい……」
「……え？」
「あっ……！」
その人の驚いた顔を見て、自分の口から無意識に出た言葉を一拍遅れで認識したあおいは、咄嗟に口元を手で覆った。
「ご、ごめんなさい！　そのっ、無意識で……！　えっと……！」
「……ふふっ、うふふっ、大丈夫よ。どうもありがとう」
楽しそうに笑い、嬉しそうに微笑んだその人の姿に、あおいの頬がほんのり赤く色づいた。
「あ……えっと、助けて下さってありがとうございました」
「いいのよ、気にしないで。それより、なにもされなかった？」
「あ……はい。一応、大丈夫です」
「そう？　ならいいんだけど」
安心したようににこりと微笑んだその姿に、あおいはまた見惚れてしまう。
長い髪にワンピース型の制服と、見た目はとても美しい女性に見える。更に高身長でとても綺麗な声。けれど、その声は女性の声とは違う。あおいには柔らかさの中に凛々しさがある男性の

声に聞こえていた。
「ところで、あなた白い制服を着てるってことは編入生でしょう？　どうしてこんなところにいるの？」
「あ……それは……」
　あおいは先程の男子生徒から逃げていると、いつの間にかここに迷い込んでしまった経緯を説明した。
　説明を聞いたその生徒は、頭を抱え、大きな溜息を吐きながら、呆れたように首を振る。
「はぁ〜……なるほどね……そういうことなら、私が教室まで案内するわ」
「え……!?　いいんですか……？」
「もちろん、あなたさえ良ければだけど……」
　「どうかしら？」と首を傾げると、『その人』の肩からプラチナブロンドの髪がサラリと滑り落ちる。
「……ご迷惑でないのなら……」
「よかった。それじゃあ行きましょうか」
　「こっちよ」と案内を受けながら、あおいは『その人』の後を追うように裏庭を後にした。

◇ ◇ ◇

　手を引かれて来たのは、見覚えのある裏庭。
　人気のない緑に囲まれた中を、徐々に脚の速度を落としながら進み、少し歩いた所で鏡はあおいの手を離して振り返った。
「ごめんなさい、連れ回してしまって。大丈夫？」
「あ、はい、大丈夫です」
　心配したように眉を顰めながら微笑む鏡に、あおいは頷いて見せる。
　食堂へ置いていてしまった勇香を気にしつつ、あおいは鏡へ真っ直ぐ向き合い背筋を伸ばした。
「あの……また助けて頂いて、本当にありがとうございます」
　あおいが深々と頭を下げてお礼を言うと、鏡は「気にしないで」と笑いながら手を振った。
「あの林って人、前にも下級生にしつこく『シブリング』を誘ってたことがあって……普段は悪い人ではないんだけど、怖い思いをさせてしまってごめんなさい」
「いえそんな……！　高麗さんが謝ることでは……」
「あら、私のこともう知ってくれてるの？」
「はい、友人から教えてもらって」
「そう。驚いたでしょう、話を聞いて。怯えさせたりしていないかしら……」
「……怯える？　なぜですか？」
　きょとんとした顔で鏡を見つめるあおいに、鏡は一瞬驚いたような顔をすると、すぐに小さく笑いを零した。
「……いいえ、なんでもないわ。　それじゃあ、改めて。高麗鏡です。よろしくね」
「あ……清澄あおいと申します。よろしくお願い致します」
　あおいは背筋を伸ばし、再度鏡へ礼儀正しく頭を下げると、鏡はニコリと微笑んで見せた。
「それにしても、編入早々色々な人に声をかけられて大変でしょう」
　辺りに咲いている花へ近づきながら、鏡はあおいが色々な生徒に『シブリング』の誘いを受けていることが、既に学園内で噂になっていると話をした。
　あおいはその話に驚きながら、困ったように視線をずらして微笑む。
「そう……ですね。でも、どうして私なんかが声をかけられるのか、全然わからなくて……」
「そんなの簡単だわ」
　花を眺めていた鏡があおいへ振り向く。
「あなたがとても魅力的な子だからよ」
　先輩と『シブリング』を結ぶことは、下級生にとってステータスの１つである。

　それと同じように、目立つ後輩や人気のある後輩、頭が良かったり、顔が整っている後輩と『シブリング』を結ぶことは、上級生にとってステータスの１つとなる。
「うちの編入試験に合格するくらい頭が良くて、おまけに物凄く可愛いもの。始業式で挨拶した時から、皆目を付けてたんじゃないかしら」
「か、可愛い……？」
　唐突な誉め言葉に、あおいは困惑した表情をしながらも、照れ臭そうに頬を染めて俯く。その姿を見て、鏡は目を細めながら優しく微笑んだ。
「当分は告白……というか、お誘いが止まないかもしれないわね」
　鏡の言葉に、あおいの表情が曇る。
　これから当分、校内を歩く度に今日のようなことが起こってしまうのだろうか。
　わからない。編入試験に合格した、少し勉強ができるだけの自分に、そこまでの魅力があるなんて、あおいは一切感じることができなかった。
　頭が良くて、物凄く可愛いと言われても、嬉しさはあるが、納得はできない。
　そして何より、自身のステータスの為に、自分とシブリングを結ぼうとしているのか。と、あおいは胸の辺りに小さな引っ掛かりを感じていた。

　黙り込んだあおいの暗い表情を見ながら、鏡は考え込むかのように視線を下げた。
　そして体ごとあおいへと振り返ると、腕を組んで声をかける。
「――ねぇ」
　鏡に声をかけられ、あおいは沈んでいた顔を上げて鏡へと目線を向ける。
　腕を組んで彼女を見つめていた鏡は、ニコリと口角を上げてあおいへ言葉を投げかけた。

「あなた、私の『妹』にならない？」